

ハイサイ沖縄

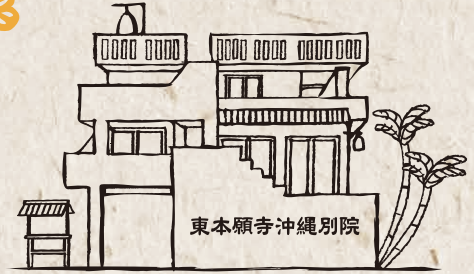
5

May. | 2021
沖縄開教本部通信
vol.93

※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと

- 目次
- 第一回 「私にとっての沖縄の学びとは」 尾畑文正
 - 沖縄はいま! 「土砂採取反対ハンガーストライキ」
 - 「グリーンフ」(死別の悲嘆)への取り組み
 - コラム 「旅に出たい!」 長谷 暢

真宗大谷派
東本願寺
SHINSHU OTANI-ji



第一回 「私にとっての沖縄の学びとは」

同朋大学名誉教授 尾畑文正

これから四回連続で「私にとって沖縄の学びとは」というテーマで、浄土真宗と沖縄について考えてみたいと思います。私の人生の中で、沖縄がはつきりと私の意識に突き刺さったのは同朋大学(名古屋)で仏教を学んでいるときでした。その頃、世界各地でベトナム反戦の運動が広がり、沖縄ではアメリカの占領支配からの解放を求める「復帰」運動が渦巻いていた。私自身は演劇部で活動する

中で、少しずつ現実社会の矛盾・不正・歪みに触れていました。あるとき、私は沖縄から社会福祉を学びにきていた同級生から、「佐藤くん(私の旧姓)、あなたは私たちがパスポートを持ってしかヤマトに来ることができない、その現実の意味が分かりますか」と厳しく問いたただかれた。私は返す言葉もなく黙って俯くだけであった。この同級生の糾弾を受けてから、沖縄は私の心にずっしりとした錘を降ろして現在に至っている。



日本へ行く際に必要であった「日本渡航証明書」(発行は琉球列島米国民政府)。日本に入国する際のスタンプは「帰国」となっている。母子手帳は1971年「琉球政府」が発行した物。通貨の写真は1946~58年まで流通した米軍発行の軍票で「B円」と呼ばれた。58年以降は米ドルが使用された。

当時、私が学ぶ真宗学では「自己とはなんぞや、これ人生の根本的問題なり」(清沢満之)という言葉が真宗を学ぶアルファでありオメガであると考えられていました。

私はそれが大切な問いとは承知していても、大上段に「自己」とは何なのかと無媒介にいわれても、私には漠然としすぎて、その言葉にリアリティーを持つことができなかった。しかし、同級生が発した私に対する糾弾の声は、沖縄を無視し排除して、何もないかのように生活している、まさしく矛盾・不正・歪みの只中にある私を問うものでした。それをきっかけにして、私は「自己とはなんぞや」の問いを自分の問題としては、「戦争する自己」、「差別する自己」を誤魔化さないで見つめ、向き合うことが自分の課題となりました。今にして思えば、同級生が私を問うた問いは、沖縄を差別している私の問題は当然として、さらには仏教学科生として浄土真宗に学んでいながらも、全く浄土真宗に学んでいない私の現実でした。それは同じ頃に別の同級生から、「佐藤、あなたが坊さんは親鸞を担いでいるだけで、少しも親鸞を生きていないではないか」と私を問うた問いに重なります。言うなれば、浄土を真実の宗(課題)とする学びを觀念にしている、そういう現実遊離の私の学びを問うものでした。それは五十年後の今も全く変わらない、沖縄から問われている問いです。

【沖縄はいま！】 「土砂採取反対 ハンガーストライキ」

戦没者の遺骨が残る本島南部の土砂を、名護市辺野古の新基地建設に使う計画の断念などを求め、沖縄県遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」代表の具志堅隆松さんが三月一日～三月六日の間、沖縄県庁前の県民広場でハンガーストライキを

行った。

具志堅さんらは沖縄防衛局に本島南部の土砂採取計画の断念、玉城知事に採掘業者への事業中止命令を出すことを求めた。集会なども行われ六日間で集まった署名は二万筆を超え、県内外に共感の和が広がった。最終日の六日午前には玉城知事が訪れ



「ガマフヤー」代表の具志堅隆松さん

「人道的にいけないというところが、法律的につながるかを一生懸命探している」と伝えた。

「グリーン」(死別の 悲嘆)への取り組み

現在、宗派でも取り組みが進む「グリーンケア・ワーク」であるが、沖縄別院では開設当初から十余年「値遇の会」としてグリーンワークを行っている。カウンセラーの資格を持つ職員と、県内有志のカウンセラーで月一回、ファシリテーター二名体制で希望者を受け入れている。死別の悲しみ「悲嘆」を意

味するグリーンは、葬儀や法事に関わる僧侶にとっては身近な課題である。心理学のエビデンスとして提唱された「グリーン」という概念であるが、仏教発祥以来、連続と続いてきたその時代その場所での、僧たちが担ってきた課題ではないだろうか。身近な人との死別後に急性ストレス障害が起き、一か月以上放置されれば、PTSD(心的外傷ストレス障害)を発症する可能性があるとの専門家の研究結果もある。



これは仏教が初七日、四十九日などの中陰法要を大切にしてきた事と奇しくも重なるのである。毎回参加者は一、二名程度と決して多くはないが、人数ではなく内容を重視してこれからも大切なあゆみとして継続予定だ。

「コラム」 「旅に出たい！」

これまでもいつも旅をしていたわけではないが、コロナが広まってこんなに長くいわゆる「旅行」をしたことがない期間はない。なぜ旅行が楽しいのだろうか？ だいたい前にJALのポスターで見た言葉を思い出した。

「本当の旅の発見は新しい風景をみることでなく、新しい目を持つことにある。」

フランスの作家マルセル・ブルーストの言葉だそうである。いろんな旅の楽しみ方があるとは思いますが、旅の発見として「新たな目」すなわち自分の価値観が覆されるようなものに出会うということなのだろう。なんだか仏教にも通じるように思う。「自分探しの旅」なのかもしれない。

思えばこれまで異なる歴史と文化を持つ地で生活したことを通して、自分自身の生き方が問われてきた。特に沖縄には長く住んでいてそう感じる。それが「新しい目」だったのかもしれない。その意味では私はどこかに行かなくとも、今ここで「旅」の楽しみを得ているのかもしれない。

遠くへ行つて、いろんな人と出会ったり、逆に沖縄にいろんな方がお越しになって、その方々と出会うこともまだしばらくは難しいかもしれない。ならばあらためて近所を「旅」し、身近な人と出会いなおしてみよう。「あらたな目」を獲得してみたいとおもう。

沖縄開教本部 出仕 長谷 暢